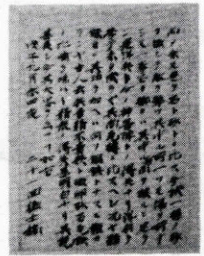
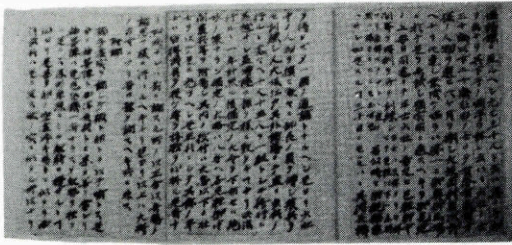
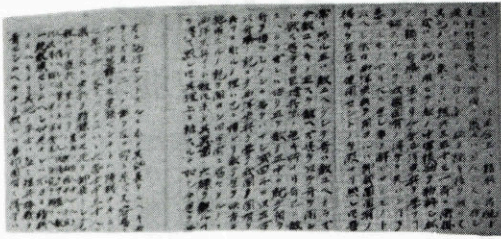
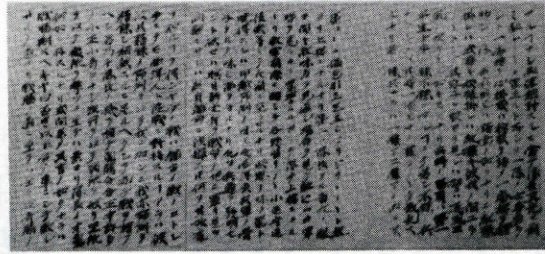
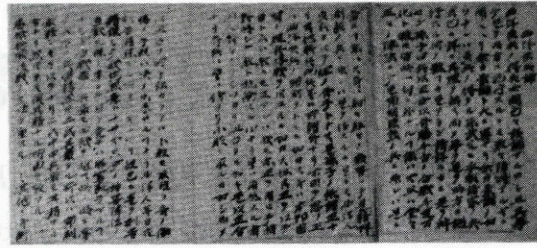


自刃

—責任を感じて—

(20)



吉田松陰 西洋歩兵論

西洋歩兵論は吉田松陰が兵学者の立場からのべたもので保守的の西洋兵学者がいたずらに旧套墨守のみで事足れりとする固陋を打破して、西洋の組織的歩兵制を取るべきであるとしたもの。

その歩兵は主として足輕以下農兵をあてるべきであるとしており、松陰の没後、門下の高杉晋作、久坂玄瑞等が組織した奇兵隊もその兵学的理念の根柢をここに見いだすことができる。

従来、松陰自筆本はないとされていたものである。

文久二年（一八六二）それ迄の公武合体開国論から、藩是を尊王攘夷論に変えて以来、朝幕の間を周旋し、ついに文久三年の将軍上洛、攘夷決行という段階になりながら、今や逆に尊王論は公武合体派に破れ、それ丈でなく朝廷からは朝敵の名をきせられ、その上第一次長州征伐が決定した。

一方攘夷決行に対しては連合盛隊の力の前に屈辱的な和議を結ば

され、こうした敗北の状況の下に藩内は反対派俗論派が政権をとるいわば出口なしの状態におかれた政之助は働くべき機もなく、毎日悶々の日を送っていた。

その時政之助は山口矢原の吉富藤兵衛方にした。

でであろうといった。

妻子をそばにおき刃物を取上げて警戒していたが、遂に九月二十六日夜明け方、寝床を抜け出て雨戸をあけて外に出た。夫人が気が付き後を追うと、畑の中に立っていた政之助は隠しもった短刀で咽喉をつき、命を絶つて了った。

死に先立ち遺書を藩主に奉っており四十二歳であった。

死に臨み「我が屍を孔道の傍に埋めよ敵兵来侵せば我吾が霊を表顕し、叱咤して之を排却すべし」すなわち遺命にしたがい山口南知原に葬った。

齊藤 元 宣

それに対して「御忠告は有難いしかし反省して見ると、酒気を帯び高杉晋作を獄におとすれ、獄の規則を破って逼塞を命ぜられた。折角大切な時に政治に参加できなかった。あの時自分が山口の政庁にいたら、京都に進発させ敗れた上に長州征伐をうける様にはしなかった。只の一日のちがいで自分の意見がくつがえされ進発が決して了った。それを思うと責任を感じざるを得ない。

この行詰った難局をどう切り拓いたらよいであろうか、藩主を補佐する役目を今日迄やって来て、藩主をこれ程困らせ苦しみお詫びは死をもって償う以外ない」といった。藤兵衛は「あなたの責任感には導く無理もないことであるが、これは時勢がそうしたので、誰れがその役にあってもそうしただろう。今日は国事多難の折だ、是非長生きして藩公につかえて下さい」

政之助は、それはちがう、若い青年が沢山後継ぎとしている。自分一人死んだ所で、困事に差支えは起らない。それ丈でなく後進に途をひらくためには、自分死ねばそれが刺戟となって、後輩ががんば

飲酒運転「五難」

- 酒酔い運転はもちろん、酒気帯び運転も道路交通法で禁じられていることは、ドライバーのみならず百も承知のこと。
- わかっちゃいるけど、毎年全国で一万人以上の人が酒酔い・酒気帯び運転で交通事故を起こしています。
- 飲酒運転がこわいのは、アルコールが脳に作用し平常心を失わせるような「五難」に見舞われるからです。
- 「飲んだら乗るな、乗るなら飲むな」
- 上手に運転していると
- 錯覚する
- 居眠り運転をしやすい
- 注意力が散漫になる
- 反応が遅くなる
- 運転動作がぎこちになる